

人びとのための大学図書館という基本的な姿勢が見事に貫かれている。

大産業国家として豊かになった日本でも、その豊かさが大学図書館の開放性などにもあらわれるようになってほしいものである。

### 学生の政治運動

「学生運動」は現在カナダの大学には存在しない。学生を過激化する社会的要因がないということであろう。大学内が平穏無事なのは、大学当局や教師たちにとって有難いことであるが、視野を日常生活の枠の外に広げれば、若者たちの心をさわがしてよい問題はいくらかあると

いうことを考えると、カナダの大学生たちの保守的な無気力さには少し淋しい気がしないでもない。

しかし、なぜ学生騒動が少ないかということには積極的な理由もある。それは、大学生がカナダの社会では日本でよりもはるかに大人として受けいれられているということである。アルバータ大学には立派な学生会館（スチューデント・ユニオン・ビルディング）があるが、その運営は全面的に学生たちの手にまかされている。また週刊の学生新聞も、費用は全部大学側がもち、しかも内容への干渉はほとんど行われていない。

カナダの大学には、旧英領のアフリカ

諸国から英連邦奨学金制度を通じて沢山の黒人学生が入学している。私の研究室の博士課程の学生の一人もウガンダからの若者だ。アフリカの政治的現状を反映して、鋭敏な政治意識の持ち主が多いようである。

### 大学と社会

カナダの総人口は約二千三百万、大学院を持っている大学の数は六〇あまり、大学生の総数は人口の約一パーセント。州立ではトロント大学、私立ではマクギル大学などなどと、名門校を挙げることでできないわけではないが、名門校に各地から学生が殺到するという現象はない。

最高学府としての大学の社会的地位は、漠然とした感じでは戦後の日本でのそれより高いかもしれないが、大学を卒業することが、そのまま高い社会的地位、高収入の一生を保証することにはならないことを、カナダ人たちは良く心得ているようだ。

特に最近の目立った傾向として、大学への入学者数は一九七〇年代の中ほどから明らかに頭打ちの様相を呈しているのにくらべて、職業学校としての性格はつきりしている各種のカレッジの入学者は年々増加の一途をたどっているようである。「大学は出なければ……」という悩みはカナダにもはつきり存在する。

# 留 学 生 活 所 感

ヨーク大学大学院

道智 万稀子



バンクーバーからカナダに入り、トロントで生活を始めてから早や一年近く。ロッキーマウンテンと太平洋に囲まれたバンクーバーとは異なつて、トロントは全くの平地にあり、のっぺりと広がった大地を思うままに区切って建設した、清潔すぎる程の近代都市である。私は昨年夏二カ月をトロント大学ですごしたあと、九

月から現在のヨーク大学へ移り、社会学部の修士課程で勉強している。カナダの大学といつても私の知っているのはこの二つの大学だけで、滞在期間も短く、そのうえ、ヨーク大学は現在学生総数が二万三千人程の大きな大学なので、私の見聞した範囲は非常に限られていることを、最初にお断りしておきたい。

### カレッジ・システム

ヨーク大学は時代の要請にそつて建設されてからまだ十年ほどしかたつていない新しい大学で、トロント郊外の広々とした風景とは対照的な、近代的で新しい建物が並び立っている。夜間を含めて九つのカレッジから成るカレッジ・システ

ムをとり、学部は入学したあとそのうちのひとつを選択する。それぞれのカレッジは、カレッジ新聞を発行し、各種のクラブ、集会室、ダイニングをもち、また第三世界の研究を中心とするとか、都市研究を特徴とするとかというように、カリキュラムに個性をもたせている。全寮制ではなく、各カレッジの寮に住む学生は全体の二割弱ということ。

日本の大学での学部にあたるのは、ここではArts, Science, Fine Arts, Administrative Studies, Environmental Studies, Graduate Studies, Law School, Educationにわかれるファカルティ。各カレッジの一年生は教養科目として、いくつかの個別指導クラスをとり、二年以降に専門を決める。各建物が一学部で占められるシステムと異なり、学生が専門にこだわることなくまじわりやすい雰囲気を作る